後　記

本号は、三名の専任教員と一名の非常勤講師による研究論文を掲載した。古代、中世、近世、近代と、日本文学をめぐる各時代の論考によって構成することができた。

令和元年十二月七日に、第六十三回駒澤大学国文学大会が開催された。講師は、本学教授の勝原晴希氏と、作家の牧野節子氏であった。

始めに勝原晴希先生より、「萩原朔太郎と自然」と題する講演をいただいた。朔太郎の詩に見える自然とは、「意味なき世界と意味によって秩序立てられた世界との、中間地帯ではないか」というご指摘が、朔太郎の詩と、室生犀星や三好達治らの詩を読み比べることによって、すらりと得心されるお話であった。それはまた、朔太郎の詩を朗読されるさいの、勝原先生のお声や語りによっても十分に納得されるものであった。ご講演というライブならではの、詩が生きた声として立ち上がる現場を体感できる貴重な機会に、聴衆の皆さんも聞き入っていらっしゃった。萩原朔太郎に独特の自然観が、勝原先生の明快な語りによって浮かび上がる、大変魅力的なご講演であった。

続いて、作家の牧野節子氏に「創作の愉しみと言葉の魔法」と題する講演をいただいた。牧野先生は、本学で児童文学の講座を長くお持ちいただいていることもあり、会場には牧野ファンの多くの聴衆が詰めかけ、盛況な会となった。ご講演では、ご自身の作家としての歩みを、具体的な作品に沿いながら振り返るというもので、大変興味深いものであった。「小さな童話大賞」、中央公論社の「女流新人賞」を受賞されて作家活動に入られたわけであるが、お話は、それ以前の少女時代から現在まで一続きに続く、夢と探究心にあふれるエピソードの連続で、まことに楽しいお話であった。「生きていることがすでに書いていることと同じこと」「きっと願いはかなうと思うよ」「人生にむだなことはなにもないよ」といった牧野先生の、心に響く語りかけに、多くの学生が励まされたご講演であった。残念ながら、先生は本年度をもって本学非常勤講師の職をご退任になられる。牧野先生のますますのご活躍をお祈り申し上げます。

（M）

編集委員　松井　健児
倉田　容子